

○ 市立名寄短大 青木 香保里      北海道教育大 藤本 尊子

〔目的〕北海道は気候的に寒冷と区分され、とりわけ道北内陸部の冬季は寒さが厳しく、雪の多い特徴を持っている。心身の発達が著しく活動が活発な小・中学生にとって、「衣服・被服」は重要な役割を担っている。厳しい自然環境のなかで、最も身近に快適環境をつくりだす働きが「衣服・被服」に期待される。本研究では、寒冷地における小・中学生の衣生活実態および着装認識を調査し、子どもの保温性認識形成を重視した教材の検討と現行小・中学校教科書における「衣服のはたらきと着方」の内容補強を試みる。

〔方法〕道北寒冷地の冬季・厳寒期における小・中学生の着装実態調査を行い、着装認識を問うアンケートを小・中学生ならびにその保護者に対して実施した。調査およびアンケート結果から、寒冷環境の実態に即した環境条件、着装形態、被服材料についての基礎的実験（装置：KES-ThermolaboⅡ他）を行い、保温性や熱物性値を得た。実験結果をもとに、小・中学校家庭科教科書における「衣服のはたらきと着方」の内容について分析し、保温性概念形成に資するデータとする。

〔結果〕着装実態調査およびアンケート結果から、①学年が上昇するに従い、防寒に応じた着装形態は少なくなる傾向、②防寒や保温性に関する認識は曖昧なレベルである、等が把握された。また、現行小・中学校の家庭科教科書を分析したところ、①寒冷地の着装実態を前提にした場合、記述や図表は不十分である、②保温性概念の補強が必要、等が判断された。寒冷地における小・中学生の衣生活実態把握、および認識発達の側面を重視した教育内容および教材の必要が示唆された。